



| | |
|--------------|---|
| Title | レッジヨ・エミリアの幼児教育におけるアトリエの空間とその変遷：ディアーナ幼稚学校とニルデ・イオッティ乳幼稚学校の内部空間の比較を中心に |
| Author(s) | 西影, めぐみ |
| Citation | デザイン理論. 2025, 85, p. 76-77 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/100282 |
| rights | |
| Note | |

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

レッジョ・エミリアの幼児教育におけるアトリエの空間とその変遷 ディアーナ幼稚学校とニルデ・イオッティ乳幼稚学校の内部空間の比較を中心に

西影 めぐみ 大阪大学大学院在学

はじめに

北イタリアのレッジョ・エミリア市で実践されている幼児教育では、「アトリエ」という芸術活動の空間が重要な役割を果たしている。アトリエは、素材や道具を用いて子どもたちが多様な表現技術を学ぶ場所であり、1960年代に「アトリエリスタ」という専門の芸術教師とともに導入され、1972年に市のすべての幼稚学校に設置することが決定した。

一般にレッジョ・エミリアの幼児教育にかんする研究は教育学や心理学の分野におけるものがほとんどであり、その教育空間に対しても、透明な壁を用いた室内外の連続性や高い天井から差し込む自然光、広い共有スペースというような共通の特徴以外は言及されてこなかったため、空間デザインの新たな視点からアトリエを考察することに大きな意義があると発表者は考えている。

本研究では、1970年に開校したディアーナ幼稚学校と最も新しく2003年に開校したニルデ・イオッティ乳幼稚学校の内部空間を比較し、建築図面や写真の分析、現地での調査により、アトリエの空間的配置およびその変遷を分析した。

ディアーナ幼稚学校とアトリエの確立

ディアーナ幼稚学校はレッジョ・エミリア市の中心部の公園内に位置する、レッジョ・エミリアの幼児教育の代表的な学校である。ディアーナの開校に際し、ヴェア・ヴェッキというアトリエリスタが招かれ、内部空間や環境に関して芸術的な視点がもたらされた。ヴェッキの夫で建築家の

トゥッリオ・ヴィーニは家具や内部空間をデザインした。ここで当時のイタリアの建築ムーブメント、「ラディカル・デザイン」の影響を受けた、透明の格子状のガラスの壁や遊具が配置された。

1970年代以降、レッジョ・エミリアの幼稚学校では開校後の空間の使用状況の調査が行われた。この調査には都市調査の手法が用いられており、子どもたちや教師、親の評価をふまえて内部空間の再評価が行われた。これにより中央ホールは人々が集う場というメタファーとして「広場（ピアツツァ）」と名付けられた。

ディアーナ幼稚学校の現在の平面図を見ると、ピアツツァを中心には、ダイニングスペースや中庭や三つの学年のクラスが配置されている。ヴェッキによると、ピアツツァの奥の透明の壁によって区切られたスペースはもともと明確に定義されていなかったが、園庭に面しており採光にも適していたことから、子どもたちが芸術活動を行う空間として「アトリエ」と名付けられたと考えられる。アトリエは子どもたちが自由にアクセスし活動できるスペースであるだけでなく、教師や親たちが子どもの活動の過程を一目見て理解できるようなスペースとなった。

ミニ・アトリエの実現と三つの空間

1971年に開校した別の幼稚学校の校舎の調査により、L字型のフロアプランで教室を配置することが教師や子どもたちのグループ活動に適しているということがわかった。それは、部屋の空間の一部を視覚的に見えるようにし、不透明な壁で部

分的に仕切ることで視覚的干渉が少なくなり、作業に集中できるというものだった。この発見を活かすため、ディアーナ幼稚学校が火事により改裝された際には、東に5メートル拡張し各教室を三つの空間に分け、L字型のフロアプランを採用した。メインの教室の他に、以前から構想していたミニ・アトリエの空間と、視覚的・音響的に閉ざされた第三の空間が生まれた。

ニルデ・イオッティ乳幼児学校

ニルデ・イオッティ乳幼児学校は2003年に開校した、レッジョ・エミリアの幼稚教育施設で最も新しい校舎である。イオッティはレッジョ・エミリアの郊外に位置しており、この地域の学校不足のニーズに応える形で開設された。

建築設計はトゥッリオ・ヴィーニによって行われた。本来、別の施設として分けられてきた乳幼児保育所と幼稚学校がこの学校では同じ校舎の中に統合され、0歳から6歳までの一貫教育が行われていることが特徴である。規模が大きくなうことにより、校舎が一階建てから二階建ての構造へと変化した。

アトリエの位置の比較

ディアーナではアトリエは北東の端に位置し、園庭に面している。西側中央にある入口からピアツツアを通った奥の空間に位置し、入口・ピアツツア・アトリエが一直線に並んだ状態になっている。一方、イオッティではアトリエは校舎の中心部に位置し、園庭からは奥まった場所にある。北側中央の入口・ピアツツア・アトリエが一直線に並ぶように配置されており、入口とアトリエを結ぶ線とピアツツアの水平線が十字を描く構造となっている。どちらのアトリエも共通して入口から中の様子がすぐ見えるようになっており、どの空間からもアクセスしやすい場所にある。

ディアーナのアトリエは活動のための十分な大きさがあるのに対し、イオッティのアトリエの空

間は小さく、芸術活動の場としては実際には機能していないようだった。イオッティでは新たに導入されたオープン・スペースという空間が芸術活動の場となった。

各教室の空間構成の比較

ディアーナの教室と同様に、イオッティの教室も三つの空間で構成されている。メインルームとミニ・アトリエ、そして温室と呼ばれるオープン・スペースである。ディアーナ幼稚学校のミニ・アトリエがメインの教室とガラスの壁で区切られているのに対し、イオッティのミニ・アトリエはメインルームとつながっている。ミニ・アトリエとオープン・スペースとの間に部分的に不透明な壁があり、ミニ・アトリエの南半分がセミクローズド空間となっている。イオッティにおいては完全なL字型ではないが、オープンな空間とクローズな空間の併用が見られる。また、ディアーナは天井の高さがどの空間も同じであるのに対し、イオッティでは吹き抜け天井や中二階による低い天井といった高低差のある空間が生み出された。

結論

入口、広場（ピアツツア）、アトリエという一直線の位置関係、L字型を活かしたフロアプラン、オープンな空間とクローズな空間の併用といった特徴はディアーナからイオッティへと受け継がれた。イオッティにおいては内部空間が天井の高低差によりさらに多様な空間となり、乳幼児保育所でも幼稚学校と同じ教育空間が実践され、乳幼児の活動の幅が広がった。

イオッティでは校舎の規模が拡大したことにより、アトリエの機能が分散した。園庭に接するオープン・スペースがアトリエの役割を担い、本来アトリエとして設計された空間は人々が集う場となった。アトリエは特別な場所から、レッジョ・エミリア・アプローチの教育の姿勢そのものとなり、アトリエの空間は象徴的な場所となった。